

記 入 日 2023 年 10 月 17 日  
 助成団体名 一般社団法人きぼう・未来・水俣

## 2022年度「水俣・熊本みらい基金」助成事業報告書

企画テーマ	水俣病を伝えるプログラム活動
取り組み実施期間または日時	2022 年 10 月～2023 年 9 月

### 【取り組み目的】

前史は、1998 年、「ほっとはうす」スタートから 20 数年前になる。「水俣病から宝物を伝えるプログラム」を、水俣市内の小中学校の児童生徒、水俣病を学びに水俣に来られた大学生や研究者に継続して伝えていく活動を支えていく取り組み。このことは、水俣病により心身共に苦しみの体験をされてきた患者さん達ではあるが、人生のライフステージごとに「きぼう」を持ち続けてきた。

差別等の負の体験を伝えながらも、語りの中には決してあきらめなかった「きぼう」を語りさらに、「きぼう」の実現した姿を語る。この語りは、患者の人生の自己肯定につながる大切な生きがいとなる。

このプログラムを体験した人たち（児童・生徒・大学生・市民・研究者）は、イメージの中の悲惨なだけの水俣病から患者さんの人間としての豊かさ気づかされる。水俣病は公式確認から半世紀をとくに過ぎて、終わっていない現在進行形であり多大な課題がある今の水俣病に近づいてくれる。

### 【取り組み内容と成果】

2021 年度は、コロナ禍の中での取り組みであったが、今年度は直接対面するプログラムが可能になった。プログラム数は、53 回（11 回は熊本県の小学校訪問事業）学校やクラス単位の取り組みも多くあり 1,000 人以上の人達に伝えた。（小学生、大学生、市民、研究者、司法修習生等）

水俣市内のすべての小学校、袋中学校、芦北地区等への継続した取り組みも 2019 年当時の取り組みがほぼ復活した。

6 月に急浮上した水俣病の歴史的原点の地である百間排水口樋門撤去の水俣市の方針。この問題に水俣病を 25 年間継続して伝えてきた患者達は、水俣市に対して素早い抗議の行動を開始して多くの市民を巻き込み県庁、環境省、有識者会議を組織して東京での記者会見と当事者と支援者が動いた。この行動費を基金で賄うことができた。

8 月には、長崎大学へ宿泊を伴う出張プログラムも実施した。企画した長崎大学の要請を超える患者の強い希望により 2 名の患者が、基金を使用しての参加になった。地元新聞にも取り上げられて、講演をカネミ油症の被害者の方も聴講されて大変有意義な被害者・当事者交流となった。

事務所のバリアフリー化では、トイレの修繕費を基金で賄う結果となった

### 【備考欄】

県の補助金等では支出ができない費目を貴団体よりの助成金で賄う予算とした。

補助金が入金するのは月間の事業終了後からしばらく間があるので、運営資金が常にギリギリなのでその間は借入金や貴団体の助成金も運営費の一部で運用させていただいた。

2022 年度の決定金額が 40 万円に合わせて当初の予算を変更し、寄付金に 2,760 円を計上して収支報告書とした。

## 水俣病補償「等級変更の壁」 胎児性患者 松永幸一郎さん／熊本県

症状悪化 車椅子生活でも… 基準非公表「納得できぬ」 2022.6.1 西日本新聞朝刊

公式確認から66年が過ぎた水俣病を巡っては、取り残された被害者の救済をはじめ多くの課題が残る。母親の胎内でメチル水銀の影響を受けた胎児性患者の松永幸一郎さん（58）＝水俣市＝は歩けなくなった2010年以降、原因企業チッソからの補償増額を求め続けるが、認められていない。「認定患者の症状悪化」も見過ごされてきた問題の一つだ。 (村田直隆)

認定患者にはチッソと結ぶ補償協定に基づき、慰謝料や医療費、年金などが支払われる。症状に応じてA、B、Cの3ランクに分かれ、それぞれ金額が異なる。症状が悪化すれば、総務省外局の公害等調整委員会（公調委）などに等級の変更を申請できる。

松永さんは、水俣病の公式確認から7年後の1963年、チッソの水俣工場近くで生まれた。7歳まで歩くことができず、療育施設で育った。20歳でBランクの患者と認定された。45歳ごろから股関節の痛みがひどくなり、趣味の自転車に乗ることができなくなり、今は車椅子での生活を余儀なくされている。

2010年以降、公調委に対し補償額が高いAランクへの変更を4度申請したが、「変更に至るほどの日常生活の支障は認められない」として4度とも棄却された。公調委は等級を決める基準を公表しておらず、「変更の際は、水俣病としての症状の進行具合などを個別に判断している」という。1974～2020年度に、570件の等級変更申請を受理したとする一方、変更を認めた件数さえ公開していない。

「変更の基準も分からずに納得できない」。松永さんは公調委を相手に提訴も考えたが、2年前に知人の小児性患者の男性が変更を認められたこともあり、5度目の申請を決意。「日々の生活できつい思いをしている。患者の気持ちを分かかってほしい」と訴える。

支援者の加藤タケ子さん（71）は、30～40代になって身体機能が低下する胎児性患者を見てきた。「補償の見直しが認められずに泣き寝入りする患者もいる。症状の進行にもっと目を向けるべきだ」と話す。

松永さんを定期的に診察する岡山大大学院教授で医師の頼藤貴志さん（45）は「胎児性患者は元々、身体にハンディを抱えているので、加齢に伴い骨や股関節に負担がかかってしまう。日常生活動作（ADL）が低下しているのは、水俣病が関係しているといえる」と指摘している。



↑ ニュースの題は患者会の事業部門にあたる法人「きぼう・未来・水俣」からつけました。編集 東京支部

## 水俣病：百間排水口の樋門、保存を 水俣病患者団体が要望 2023.06.29 毎日新聞地方版／熊本

水俣病を引き起こしたメチル水銀を含む工場排水をチッソ水俣工場（熊本県水俣市）から水俣湾へ排出した百間（ひやっけん）排水口の樋門（ひもん）（逆流防止用のゲート）を撤去することを決めた市の方針を巡り、反対する患者団体が28日、保存を求める要望書を市に提出した。提出したのは「水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会」。要望書では「排水口と



百間地藏前に座る西川上人を訪ねた患者会皆さん 関根浩撮影

樋門は原爆ドーム同様、重要な歴史的遺構だ」として樋門の現場保存や一帯の文化遺産登録などを求めている。

施設を管理する市によると撤去は老朽化のため。足場を含む樋門の腐食などが進み、コンクリート製の足場の崩落やゲート流失の恐れがある。「市民の安全を考えればやむを得ない」として近く作業に入る意向を示す。

会の代表で水俣病胎児性患者の松永幸一郎さん（60）は「樋門は市民にとって水俣病を伝える財産。市がなんの説明もなく撤去を決めたのは腹立たしい」と話した。会は近く熊本県や環境省にも要望書を提出する予定。28日は会の案内で熊本県議4人が現場を視察した。【西貴晴】

## 百間排水口 樋門撤去ではなく保存を求める要望書

2023年6月28日

環境大臣 西村明宏様／熊本県知事 蒲島郁夫様／水俣市長 高岡利治様  
水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会

代表 松永幸一郎／副代表 永本賢二 長井勇

水俣病の原因となる工場排水を流した水俣湾・百間排水口の樋門について、水俣市が突然、老朽化を理由に撤去すると聞き、驚いています。

百間排水口と樋門は、すでに排水路としての機能は無くても、世界の首脳が訪ねた広島原爆ドーム同様、重要な歴史的遺構です。広島市における原爆ドームと同様に老朽化している樋門の扉やコンクリートの足場は修繕し、4つの樋門をすべて現場に今の姿で保存し後世に長く伝えるべきです。

市議会にも市民にも十分な説明をしないまま撤去を強行すれば「水俣病を早く忘れたいチッソに付度した高岡市政」として歴史に残ってしまいます。水俣病事件の教訓を伝え続ける活動をしている当会のフィールドワークでは、水俣病の爆心地でもある百間排水口付近の風景は、1959年頃、猫実験に供された毒排水や1968年公害認定当時を想像できる重要なポイントで、水俣病患者が渾身の思いで建立した、水俣病の苦しみや悲しみが詰まるゆかりの地八十八カ所を想起させる慟哭の碑と百間地藏もあり、一帯は水俣病事件史の歴史風致地区に匹敵します。

水俣病を教訓とした水銀規制条約を推進している環境省、県内小学生に水俣訪問学習を促している熊本県にとっても、これを黙視するならば県の軽重が問われます。百間排水口の樋門の現状保存を強く要請します。

- 記
- 1、樋門の扉やコンクリートの足場は修繕し、4つの樋門をすべて現場に今の姿で保存し水俣病歴史遺構として後世に長く伝えること。
  - 2、百間排水口樋門を含む一帯を水俣病歴史風致地区として位置づけ、文化遺産登録の手続きをすること。
- 以上

↑ ニュースの題は患者会の事業部門にあたる法人「きぼう・未来・水俣」からつけました。編集 東京支部

## 4月2日 桜満開の湯ノ見<sup>ゆのこ</sup>で花見

撮影・斎藤靖史



前列右から山添友枝、加賀田清子、長井勇さん。その左は、いつも患者会を全面的に応援して下さる坂本龍虹さんご夫妻です。その左、市議の杉迫さん、松永幸一郎さん。坂本夫妻の後ろで「ペッパーミル」ポーズの永本賢二さんの両隣は地元紙と通信社の記者さん。晴天のもと、今回は豪華ゲストの花見会でした。



長井勇さんの笑顔。後ろは松永幸一郎さん



車イスで登る加賀田清子さん

↑ ニュースの題は患者会の事業部門にあたる法人「きぼう・未来・水俣」からつけました。編集 東京支部

## ■12.6 国会・院内集會に参加、 患者会の現状を議員に報告

昨年12月、参議院議員会館で開かれた水俣病の院内集會に、加藤タケ子事務局長が参加

当日、国会議員や参加者に配布した患者会紹介資料を転載します。



### 設立の経緯について

水俣病胎児性小児性患者達は30歳代半ば、年齢に不釣り合いな急激な身体機能の低下が始まり、行く手に多くの不安を抱えていた。その最中、20歳の頃から決意してきた「仕事をして地域で普通に暮らし生きる毎日」を、実現するため共同作業所まっとうすを1998年に創設。

それから20数年、水俣病被害者等の残された課題を真正面に据えた「水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会」が2019年11月に発足。共同作業所開設からこれまでの経緯と活動を共に取り組んできた人達が、20数年の活動の「理念と志」を継承し水俣病胎児性小児性患者等が毎日を生きがいを持って過ごしていける場を支えるために患者会が設立された。

2020年1月には、この場を具体的に創り出し運営する事業体として「一般社団法人きぼう・未来・水俣」が活動を開始するが、車の両輪のごとくに以下の活動を現在行なっている。

1. 「水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会」会員を基本に、地域で普通に暮らすことに困難を有する人達への支援活動。  
9家族16人の水俣病胎児性小児性患者等をカバーしている。
2. 水俣病の教訓を伝える講演活動  
水俣病被害エリア＝水俣市、津奈木、葦北地区はもとより出水市内、熊本県内九州の各県をはじめ関東地域等に、「水俣病から宝物を伝えるプログラム」を患者と共に歩んできた者との共同トーク形式で届ける講演活動。
3. 火曜日から土曜日までの毎日を日中活動日としている。  
「仕事をする事」は、社会の構成員の一人として、大人としての役割を果たすことであり生きがいにつながる作業と活動を行っている。
  - ・水俣病を伝える活動
  - ・押花制作とその加工品として押花付き名刺作成
  - ・水俣病から環境を考える新聞紙エコバック創作
4. 水俣病胎児性小児性患者等や家族への地域生活支援を軸とする。  
移動の困難を支援＝行動援護、医療が必要に応じて適切に保障されるための受診同行、安心した毎日のための生活相談、高齢化する家族の代行。

### 取り組んでいる課題について

胎児性・小児性患者と同じ同世代の裁判で闘う患者達を、最高裁決定、熊本地裁判決、行政不服